



13
1245
9



何事と駭然と推退けんとせける。満泰妻時と喚林めて何人ぞ知れども大事の
 訴訟ありといひ轎子と駐させ快々仔細を聞き速の指揮ありある一個の老
 黨声ゆり立て先姑且留りねと喚ひられ皆齋一後方とせり。そが俣列を乱さ
 せ居り登時一個の青侍小六が身邊を走り來てうち對ひて孰視て和殿を何
 処の人氏めて目今何等の直訴ある姓名宿所夙意の趣且聞きと御証具小稟
 上られといひ小六を合笑て仰るるゆひは俺身の團司と舊縁あり嗚乎を多くいへ
 ども素生と明共新田の一流綽約は大人の由縁也。連小六と喚做せの之這年来
 東國を人と成りいひ知召せられしけれも。身小着る證據ありといひ腰短刀城
 多るる小合より推立て這個後村上天皇の脇屋刑部卿助賜りたる菊一文字の御
 劍之這義の團司も口碑より。知食を在せぬ是を御覽入且あるを疑ひし即
 坐小釋の餘の一談の見參るる人傳陳々から這意も披露願ふの之といふ

件の青侍沈吟し點頭て小六の短刀と某姑且預りて宜披露及べとと答る
 躬て短刀と受合りて遽に轎子の頭をみおそ小六がひつる趣と箇様々々と尋せあげて
 那短刀とをまもらせられ満泰聞き小合を現這菊一文字の御劍の由准后親の日
 記に寫されし俺の年来知れ今ゆゑ疑ひなき俣れ那社校の脇屋義隆の餘類を
 ると證據既小分明對面せぬあるを登見と建させと詞せり宣示し又短
 刀と青侍は遍与と轎子とせぬ青侍の俣れ小六が身邊を赴けて團司對面す
 る。俣れ俣れと知れ短刀と返けり。小程は連小六を青侍を先立立と此も何容たる
 氣色も既と満泰主の身邊を杖と近着程は老黨若黨の它の伴當主戒
 守護を魏々堂々と威羅列する中満泰主の小六を相て登見と放ち揖讓と
 此をれと招き小六と一声問と答て朝に跪いて逆旅の浪人かろ料を尊駕を
 犯と大胆る忠訴せと請稟せし幸ふと返棄られ俣速對面と允さるくと

り。その意を聲を勇士の魂世に又傳りて。其の量も多し。頭とて側聞せし伴當
 們の面を照し、自ら注し、俺君侯の死理會りて、あつたんと、思ひけり。満泰は、これと、听
 け、眉をうち頻り、めいて、いさゝか、趣あるるゝか、あり。御宗、稲城守延が、女兒の性方と、索難て
 そと、木造、泰勝の所為を、一とて、告訴せし、折則、泰勝を、召向く、然而、對決、及び、り、るも
 素より、證據を、いさゝか、守延が、推量の、臆説を、と、争何の、せんと、を、説と、退て、許
 状を、返せし、又、守延が、横死の、光景を、山賊の、所為を、一と、地方の、民們が、稟、素より、有
 司の、命、一、野兵、と、出と、緝捕、由、断る、り、か、い、ま、ま、の、賊、と、權、然、と、和殿、を、は、僻
 め、又、泰勝、と、敵、多、い、せ、と、て、中途の、噓、訴、大人、氣、を、一、正、に、證據、ある、あ、ら、む、狂、人、を、趕
 ん、と、不、狂、人、も、走、る、ふ、似、ら、誰、う、疎、忽、と、い、さ、る、に、子、を、思、ふ、優、と、あ、ら、む、と、と、雁、鳥、揚、ふ
 害、め、て、既、立、ま、く、せ、ら、む、と、小、六、を、靈、時、と、推、林、め、て、御、説、で、い、は、る、も、晚、生、他、御、の、人、と、し、て
 其、如、駕、と、犯、を、訴、し、證據、を、と、聽、と、ん、那、泰、勝、が、隱、隱、に、則、他、が、家、の、若、黨、山、勝、杉、内

奴隸、敵、介、這、個、二、名、の、招、了、也、絆、既、不、分、明、之、故、の、箇、様、々、と、地、藏、堂、の、乾、井、の、内、の、
 捕、執、措、を、顛、末、と、詞、を、と、演、説、と、る、疑、く、思、ひ、の、俱、一、なる、小、野、を、案、内、に、先
 兇、伴、當、と、遣、さ、れ、牽、出、さ、り、て、尚、せ、鄙、語、の、論、と、證據、今、何、ら、又、辯、論、及、ぶ、ら、ん、ら、ん、
 かる、向、せ、る、ま、と、も、れ、て、満、泰、敬、驚、に、着、て、あ、ら、む、俺、行、は、鳴、乎、行、は、ぬ、や、ま、ら、ぬ、と、吟、死、つ
 邊、く、伴、當、と、を、と、て、英、虞、將、曹、明、星、三、郎、若、們、の、那、里、も、十、字、仏、堂、快、赴、死、と、連
 生、不、生、拘、ら、れ、る、罪、人、們、を、牽、り、て、牽、上、快、々、せ、と、火、急、の、主、命、義、り、ぬ、と、心、も、果、を、身、を
 起、す、件、の、二、名、の、雜、色、奴、隸、を、相、從、へ、然、而、庶、吉、と、案、内、の、地、藏、堂、來、て、れ、の、野、井、の、
 石、を、蓋、し、と、あり、那、杉、内、敵、介、の、這、井、の、内、と、庶、吉、が、い、ま、大、家、あ、ら、む、と、い、は、れ、石、を、招、ん、と、あ、ら、む
 此、の、動、き、り、け、れ、絆、の、筆、中、這、石、と、誰、が、拮、據、あ、ら、む、と、向、へ、庶、吉、微、笑、て、敢、人、と、借、り
 其、あ、ら、む、俺、東、人、の、い、ち、り、あ、ら、む、却、も、あ、ら、む、い、は、る、と、大、家、駭、呆、れ、て、然、ら、ぬ、和、郎、が、御、主、人、の
 什、麼、人、の、あ、ら、む、あ、ら、む、い、は、る、と、あ、ら、む、あ、ら、む、自、成、と、あ、ら、む、け、れ、と、却、已、は、ら、ぬ、形、に、大、家、齊、一、立



五

五

五



此殿のまも心のみちよかむれん
 小六途謁伊勢国司
 此殿のまも心のみちよかむれん

伊勢国司

伊勢国司

市屋三郎

有像第三

小六

あし

懸りかど勅一幸しく幾石も命除けて杣内と敵介と牽出追立て馳て國司の面前へ
 推居の供々と稟しと索と和せり奴隷の遠く退れて非常と成るもまかりけり介程の杣
 内と敵介の面をひらき既國司の面前に牽居られてのまき驚怕れ膝折布て頭を搦
 ざりしと小六も然てそとち對ひてまれ杣内敵介の死面前で今一度向の如く招了せよ
 快の志と責らる勢ひ脱れかかれ個悪僕們の多く即便主の泰勝の悪事の趣
 送ゆる具小招了せけれ國司の小六をさうて徳和殿の掙はせ黑白分明ある泰
 勝が罪遣るべしけり先妣の忌辰より俺身廟甚茶焼香せんとて這處まで來ぬれども料
 ども殺伐の詮議の不浄と帯たの香華院に赴たさか。這里より城の立たると即便木造
 泰勝と召捕しと禁獄せ且よその意とぬれよとられて小六も此も礙議せし仰りけり
 ひも尙事遅々しく泰勝が悪事露頭とぞ知らる逐電をさす入介の信夫も
 走り亦從去殺しもある。願ふ這里より晩生小檢取使を添せて牽せぬり馬

と雜兵十名許借しぬ。死使とと泰勝の宿所小騎着け搦捕て信夫と救ひゆんぬの
 受と許合あれか。この國司の諾ひて壯なる勇士の神速との美意のあはれ。されど和
 殿一騎也とぞ那首小赴に泰勝主僕を疑ひて防戦及ん故との美のいさ。知る
 べし泰勝の父木造親政の。百阿射賀遣し。れ。目今宿所不在と。い。從
 類家僕を尋り。もと和殿小借を東西の。と論と近習小吟附て轎子の内小措
 れた。木夾一枚合寄て。ある非常の。あ。折一人たりとも俺幹人。その與の符契
 かく。當家相傳の烙字あり。俺身外士の折と。必その内一枚と轎子は容さず。隨身
 あれ。這里在る。泰勝主僕相拒む。是を中々示し。皆謹て兼伏せん。奴が疎
 畧あ。と告示し。木夾と通与し。又英虎兵將曹と。兎兎の側。召と。せ。汝達
 生と共に。雜兵を相從て。快泰勝が宿所。赴け。明星二郎の。悪僕們を牽立て
 俺が迹より。城内へ。て。ま。この。這。心。の。い。徳。と。捉。て。小六は別と告て許しぬ。と轎子小殺

日影の辰過てのみまきまき春の花の草る方へ繰返を伴當居先立後眼を
 路真気城投てかろゆ間隔て明星二郎の奴隷小索と合したる杉内と敵介を追
 立々々共侶の舊來一方へ赴ける中其英貞將曹の土居て主の轎子を送り果て
 稍身と起し小六の對ひて檢整使奉申すと告げ牽引され主の乘馬と鑓奴の牽
 寄さて卒とく小六の遞手しける登時小六を將曹と雜兵を旁ひて遙後方へ
 たる庶吉と召近着て絆の趣徳々と這里より去向を指示して汝馬附くかん英
 貞主未従ひて掩投を不到しとらう將曹のうら対ひて那木造の宿所を回し將曹
 答て泰勝の父親政と同居宅も弁陝巷の居宅所在の又千蚊の里の別荘あり其
 里未起臥する日もあるん孰小案内を致んやと云ふ小六を眉根と頼申めて本宅別荘二所
 あれば泰勝が在る処を杉内敵介の問へり然らば知りて脱走しけり什摩泰勝を
 日勤るやと問へ將曹頭と掉て否日勤るやと云ふ這月の某日より病着ありと云ふ

のもその在る処の知られぬと云ふ小六を沈吟と云ふ千蚊の別荘へ赴くべ願ふ
 那泰勝の畧奪を隠し措く信夫を父母と俱に在る本宅を憚るらん況病着を推
 けてうち籠り在る何処へ行くに件の里の何処ぞと問へ將曹點頭て亮査定ふ
 その由あり那別荘這野邊より約莫廿四町あるその路筋の徳々々箇様々ふいと
 最町寧ろ差示すと小六を听し記憶してとらふ路次をさす下御免あれと揖讓し馬
 うち乗り鐘と蹴立て其爲地を走り其雜兵并小庶吉も皆後れど日本信一と
 喘々を趕らける話分兩頭介程小木造木不泰勝の御高信夫を奪ひ折父内匠
 親政の新城修造の惣執吏也向射賀の里未赴て久く還らりければ母親小ま
 深く秘して千蚊の里の別荘の腹心の奴婢を諫てうち潜せて折々を來り信夫と挑
 かども素より孝烈堅固なる妙るれば罵辱めて百數経れも従はざ自ら殺めざる覺
 期の懲りて心長閑く日毎小樹の易料を替る本意を遂んと尋思と云ふ日より病

病ひ假う托つ將ま息ぢの與あと唱なて夜よも日ひも千ち牧まの別べ荘じやうま在ある。醫い師しの誨をる。那な山さん瀬せを
 獲えまき厚こうき若じやく黨とう杣そう内うちのちるさて。奴やつ隸れい敵てき介け共とも侶りよの山さん瀬せまよと今朝けさ未ま明めいより近ちか
 高たか峰ほう遣つらつ。今いま後ごの泰たい勝しやうの獨ひとりは之これをさす。空そらまがえり。那な山さん瀬せの即すなは效てう至し妙めうとよ
 也なり。這こ頭づの山さん瀬せ東とう西せいを。勞ろうと功こうを。かえり。け。且かつ樹じゆ易いて信しん夫ふが親おや守まも延のびの横よこ
 死しのよと報ほう知ちしと靡ひろ為なる。盡つくし。仇あやむを穿う殺ころ金かねの敷うち果はし。怨うらみと雪ゆきの溶とけ。そ
 いふ必かな親ちかの與あ。俺おれさう。做なさ。這こ計けい畧りやくの捷せつ徑けい也なり。孝こう女によの心こころを弱よわく做なさ。この即
 效てうの山さん瀬せの優う劣りやくの。あ。鳴な平へい介けと。肚はら裏うらの處ところ致ちす。決さだり。け。日ひ屬にち信しん夫ふ。成
 隱かく措かく。矮わい樓ろうを登のぼりて。現まる。信しん夫ふの衣え。ち。被かれて。臥ふす。隨まり。睡ねり。も。せ。涙なみだ流ながる。塗ぬ枕まくらの
 裏うら見みの曝はく布ふの外そと。容よう顔げん毎まい愁しゆひ。合あて。雨あめ。惱なる。漁い村むらの柳やなぎ風かぜ傷やぶる。露つゆの化け。是
 其ま優うき。と。看み惚ぼれる。泰たい勝しやうを。枕まくら方かた寄よ添そひ。慰なぐさめて。然しか而して。日ひ守まも延のびの横よこ死しの趣おも
 箇い様やう々々と。実まこと事こと虚うそ談だん只ただ信しんと。報ほう知ちし。又また。其その。那な折せは。快か知ちせん。と。思おもひ。た。も。

只ただ山さん賊ぞくの所ところ為なる。と。夢ゆめえて。仇あやむの安やす定ぢやうする。ね。歎なげき。胸むね苦くる。ま。け。ま。で。黙もく止しせ。が。你あなたの心こころ
 ひろ。俺おれの靡ひろ。その山さん賊ぞく。是こゝは。俺おれの父ちちの冤えん家けの樹きを。伐き草くさと。其その又また拂はらひ。も。索もと求もとめ。怨うらを
 復たがさん。然しかでも。心こころ後ごま。と。その身みの悪あく事こと。外ほか々々。恩おんは。被かつ。口くち説せつけり。信しん夫ふ。親おやの横よこ死しのよを。
 ぞ。ふ。堪たむ。吐つ嗟さと。叫こゑび。身みと。起たり。又また伏ふ沈しんむ。駭おど嘆たん悲かな泣なみだ。重おも重おもの憂うれ苦くる。流ながる。涙なみだ。雨あめより
 敏とししく。声こゑを。惜おぼし。ま。ち。泣なみだ。た。オ。お。返かへり。け。猛もう然ぜんと。七なな頭あたまを。拾ひろひ。て。蛾が眉まゆと。逆さか建た星せい眼がんと。眸まゆ閉し
 込こ。信しんと。泰たい勝しやうと。疾はや視し。声こゑと。戦いくさと。死しと。武ぶ弁べんの奸えん賊ぞく。良ら家けの婦め女によと。更さら奪うばす。と。恥ちと。知しる。綺き
 語ご艶えん談だん。只ただ。是こゝは。人ひとを。苦くるま。て。身みの樂がくと。做なさ。ま。俺おれの親おやの死し。と。け。ま。ま。も。秘ひと。更さら因いんが。ま。く。
 為なる。死しと。雪ゆきと。い。り。義ぎ理り欲よくを。斬きる。白しろ物もの女によと。思おもひ。悔くら。返かへま。す。る。死し。悔くら。ん。鳴な平へい哀あれ。
 各おの家けの。大おほ人ひと。俺おれの身みの。所ところ以もて。い。く。心こころを。苦くる。ゆ。夜よを。犯とがす。と。命いのち果は敢ある。ま。あ。い。ん。脚あし運うん。末すえ
 不ふ痛いたま。け。れ。什なに麼なん何なにと。せ。ん。さ。う。不ふ腸ちやうと。ぬ。つ。孝こう女によの哀あ情じやう物もの狂くる。ま。ま。不ふ猶なほも。怒おこり。不ふ堪たむ。り。
 け。又また泰たい勝しやうの。ち。對たいひ。て。俺おれの父ちち身み故こり。あ。い。り。汝なんぢが。殺ころす。あ。い。り。汝なんぢが。悪あく事ことの。故ゆゑと。身みの。危あや

此を又つて。その禍は遇ふ。然らば則ち汝の思ひ知るや。罵りて泰勝を備ふ措たる。腋挿の短
 刀を握合りて。身と起して。抜放さんと。ける。泰勝透き打落し。と腕合をて。動せ。怒
 る声も。ゆり立て。噫物々。貴府の女奴ら。靡せんと。思ひ。心長閑く。慰め。れ恩も。情も。辨へ。む
 と。この。俣。ふ。く。允。さ。や。ま。の。ま。あ。ら。う。と。結。初。り。足。を。繫。系。て。本。意。を。遂。入。這。方。へ。来。よ。と。拔。立。を。

身と汚され。と矮樓る。欄干を衝。と足踏。か。けて。跳。揚。り。裁。稠。の。間。に。撞。と。落。ら。け。る。這。嗚。喚。の
 奴婢四五名。庖福の。な。ま。り。走。出。て。相。れ。信。夫。の。巻。石。の。膳。を。と。り。撲。け。ん。と。息。絶。え。光。景。の。悲。し。

水と罵謀。と泰勝の矮樓より。直下。ら。う。声。を。う。け。て。や。然。る。謀。を。隠。藏。東。西。を。く。納。戸。へ
 引。入。れ。て。樹。幹。を。せ。ぎ。と。諭。ま。の。み。ぐ。り。其。処。へ。赴。り。て。又。勅。令。を。ま。か。せ。活。き。日。屬。の。心。畫。に。画
 餅。を。あ。ら。ん。と。喰。ひ。つ。今。や。短。慮。と。後。悔。の。額。を。病。と。忙。然。る。胸。安。く。き。こ。ひ。り。信。を。折
 ぐ。連。小。六。助。則。の。獨。駿。馬。を。鞭。を。鳴。り。て。三。十。紋。の。里。を。泰。勝。の。別。荘。へ。来。ま。れ。い。り。と。下。て

門内馬を牽入れ。駁系留めて。呼。び。よ。せ。找。入。る。一。家。兒。の。奴。婢。の。咸。信。夫。が。即。死。を。聚。謀。せ。て。

く。納。戸。の。な。ま。り。の。外。に。出。る。の。の。ま。り。一。小。六。を。四。下。と。看。回。す。と。矮。樓。を。人。の。と。か。り。く。喰。ひ。音。を
 え。と。泰。勝。あ。ん。と。猜。し。る。の。機。を。臨。み。て。此。も。猶。豫。せ。ず。忽。ち。地。を。声。を。か。けて。木。二。殿。を。在。る。
 木。二。殿。木。二。殿。と。喚。ぶ。と。泰。勝。の。胸。安。く。き。こ。ひ。思。の。折。ま。の。名。を。喚。び。て。心。も。あ。ら。ん。と。言。ふ。
 小。六。を。突。然。と。矮。樓。を。登。り。来。ま。れ。泰。勝。駭。訝。と。怪。し。和。殿。の。何。人。を。と。問。せ。も。果。だ。近。つ。た。る。
 小。六。を。佐。と。向。ひ。て。知。る。と。俺。の。國。司。の。使。者。連。小。六。と。喚。做。る。原。是。東。國。の。浪。人。と。木。造。泰。勝
 罪。惡。の。事。露。頭。不。及。び。く。則。國。司。の。密。意。を。儘。と。俺。召。捕。入。與。小。六。を。覚。期。と。せ。よ。
 と。罵。り。泰。勝。は。吐。嗟。と。ま。り。駭。き。ま。り。る。何。怯。ま。ま。と。復。せ。し。声。苛。め。く。這。癖。者。が。何。ま。い。り。や
 俺。身。を。犯。せ。罪。あ。ら。ん。非。除。の。罪。あ。ら。ん。と。封。疆。素。も。四。州。小。且。り。て。二。万。五。千。の。軍。役。を。せ。

ぬ。俺。君。の。智。勇。の。家。臣。置。か。ぬ。は。流。寓。の。浮。浪。人。と。奴。使。を。立。ち。れ。ん。と。憶。ふ。汝。の。俺。が
 機。密。を。泄。聞。る。の。あ。ら。ん。と。て。權。と。金。を。せ。ん。と。う。安。命。と。詭。騙。賊。の。兇。胆。其。頭。の。術。小

の乗る俺もあつた目小物でせんと短刀を引抜く勢ひ悍く破れとせし引外を小六が
 透き肩をとり刃を打落しと怯む利を引肩被てあつた儘と投さければ泰勝の
 真柱の頭を撲り眼眩して重畳時に取りかきつけの响は駭く芥田と記右衛門の這宅も若
 黨奴隷まであつた何れも胆を潰し推續は散動々々と大家矮樓のち登るも
 中と記右衛門のいそぎ真先不抜登り那為体小此百礙設せし主人の冤家脱下と名
 告かけつ腋挿の刀を抜て面振る敵を小六も肩をとり受流し踏込て眉間を礙と打
 惱み吐き叫ぶと記右衛門の憶を刃を裏里と捨て鈴釘弱腰下高蹴られて俯走は
 二三間も柱を面を撲り向齒三枚摧けられ流る血を軀を前火蘇枋の大壘
 傾けらる異るる嘔吐苦む声悲しく辟未朝して平張る後れて來ぬ若黨奴
 隷の小六が本意不胆落て只罵ると罵るの推捕稠るのふと找む稀むのちり
 けの登時小六を声高き虎狼の奸黨の期あつた天四訓と知るや俺は他郷の旅

客を義の與史親疎と擇ま弱し助けて強を折れ冤を伸怨と雪めて世の奸悪を
 鋤き欲する宿念越え行むけの初野井の地蔵の頭を泰勝と同惡する
 内敵を産拘らるる信夫が所在守城を敷き趣通て泰勝が惡事の顛末他
 們が招了する露頭の折料志園司の先妣の廟所へ参詣の與史と那野を過りあふ
 程は俺泰勝が罪犯と恚々と訴て山勝社内敵介を園司の從者も牽渡し且泰勝と
 緝捕の與則使節の木夾を預賜りしければ奪せぬ死馬と借きりち騎て檢登
 使英虞將曹們の先を走るる方僅泰勝使節のようも示されども実事を
 那惡僕と共侶ふらるる及び久巳とを撻拏して主従を投懲りし疑あつた
 是を英虞生緝捕の夥兵も程遠くは多るを詞せずと告示し懐を擡
 撈て那木夾を合出せし果して疑ひある園司家傳の烙字ありの實とる跪居
 若黨奴隷のいへゆえ泰勝并記右衛門の這照鑑の邊て身を起

感歎せざるは庶吉の笑ひ小六が對して恭しく遷参を陪話をも俣の妻後方侍り。
第十八回 裡應外合法を濫る
理論方正枉を繋む

登時英貞將曹の小六が武勇の掙たを只顧り賞讃と然る泰勝も對して其身の
罪惡露頭ふより小六を使ふ立られる君命を宣示して這別莊に在る所の奴婢の名を同人
數に糾きふと記右の如く共若黨二名奴隷の通て二名を過途に又婢妾も二名あり人々
御京駭に怕れて避て那這の願れ二個も漏れ召聚合て日屬の始末を鞠ふ若黨奴
諫の泰勝が信夫を夏奪せ折構らざるものあり其の機密を知ると信夫は隠措
く惡事と悟るるを又泰勝は主同惡の罪を免る所多し二個も餘さざる夜に野兵の下
知て男女齊一袴々と細めて更一個の雜兵を村長許遣と恁々と吩咐けり因て千
蚊の村長の時と移ま莊客們は復興二挺常七這別莊に來りければ將曹則村長

夫役の所要を宣示し木造泰勝罪人の主僕俱に召囚る泰勝の父親政と御高阿射
賀介赴きて本宅裏の妻在るの且這外別莊に若們姑且う成と後の如く知
をばし。このを竹竿と竹竿の竹竿一挺は信夫を乗せ一挺は泰
勝との乗せられぬ細と横に非常の備とを這宅と記右の如く首とを數珠敷系し
奴婢を雜兵們に追立させ小六と共別莊を出て身氣を還るけ介程に連小六助則義
俠の隨に支成り此百違憾をり。この身は庶吉に従て又那馬を跨り將曹們を
威先立立と後より徐に拍せけり。この日よりと遐迹の士民を件の下を憐れと小
六が義胆豪俠を賞賛せり。この名は神風の伊勢の事を後々不至る。五歳七
道は隱まき唐山の田仲王公劇子也とも傳へたり。皆其慕ふ如くはけり。回話休題却
説英貞將曹の連小六と共侶の信夫を鞠ふ泰勝們主僕九名を召捕て其氣の城へ
かる本は豫て君命を宣示する有司幾名致各々これを受合て先小六主僕を勞ひ

儲の旅舎案内と考ふ。或の問注所不在と泰勝主僕の罪惡と糾約せしめらるる登
 時。有職の毎泰勝主僕及信夫局内召容れて先泰勝と与記右衛門が惡事の顛
 末を鞠向ふ折山勝杉内敵介の細見を傍に在り。既而他們が招了る罪惡露頭の上へ泰
 勝も与記右衛門の頼陳をさるる皆河容々と罪伏して又いふ由りける。信而有司を信
 夫と對して日屋泰勝を會誓せしむ。その身の始末を鞠向ふ信夫の犯汚をせり。自ら
 及ぶ。小六が所藏の奇甚くもて再生なる緯の趣き詳しき事有司門総て考烈に賞
 する。依退くと。國司の夜獄舎を敷系々の泰勝并記右衛門杉内敵介の
 外の主の惡と承る。奴隸二名の共主僕六名を餘の奴婢の親政が本宅を老僕其思
 召出く。信と閉籠措ぐ。下知と預け遣け。小六の思を這と知り。小六の思を這と
 日英虎將曹の小六が旅宿の徒然と訪慰せ。昨夕泰勝主僕六名ひとく禁獄せられ。并
 泰勝が父木造内匠親政の阿射智の作事。出役の折れ。即使那首の死下知む。

かん目前を允され。依慎居る。又那信夫の母親老樹と五柳村の長鄰人們を召
 寄れて。只今來され。即使他們返さる。死下知の思を這と知り。國司の客を御對面と
 仰られ。昨夕の感言の聊不例る。小六の思を這と知り。是等の思を報知と安心
 させ。宣い。内意ある。來つる。小六の思を這と知り。慚愧する。信夫の晩生が義
 妹也。那養母老樹も豫示せしめられ。送る。那首に到る。然然と。這里老樹
 們の對面をせしめられ。國司の拜見せられ。進退自由致し。伴當庶民を
 晩生を代と。信夫母女を送り。五柳村遣ふ。將曹異議及。左の右の美意を
 依る。小六の思を伴當。信夫の思を。便宜ある。其の先退り。五柳の村長を
 傳へ。今夕の情由を。和郎の信夫母女を送り。五柳村に赴く。勿論和郎も知る。老
 樹の刀自病着。女見の窮厄稍解る。欽の病苦を。這里まへ。本

復せざる。況信夫の親の世も多かりき。所が眞愛の意いと果し。哀傷然とて。想像は是亦不便。和郎の那果留りて。朝の所為何れ。彼れ心用ひて。幫助ありね。俺うへ世は秘せらる。那母子の憚りも。和郎が父も。多かり。信夫報て。慰め。俺の。團司再調して。那木夾を返す。その折。意更と。聲入。の。美さる。沈吟と。その美さる。小人を。高き。便さ。那果止宿の一條。望み。いと推辞を。小六を。益る。遠慮。の。餘の東西。皆團司より。賤。和郎が側在。と。俺身の便。の。稻城の母。慰め。幫助あり。誰。俺身の代。と思。の。感。と。せ。か。叮寧。論。と。恥。懐。裏。の。端。用。合。出。金。十。兩。と。數。紙。推。包。と。庶。吉。の。遞。与。と。和。郎。の。母。女。を。送。て。稻。城。の。宿。所。に。到。り。後。ま。れ。老。樹。の。刀。自。贈。と。俺。を。せ。と。言。傳。せ。と。警。居。主。入。の。口。中。の。故。意。を。伺。い。遣。さ。し。合。を。送。と。袂。の。巻。纏。腰。纏。快。せ。と。と。理。切。

たる。主命の庶吉の且感。且更く更の辞の仰。の。及。比。と。誠。心。の。届。入。限。母。女。の。與。の。眞。愛。と。分。り。て。幫。助。あり。と。心。安。く。思。され。と。答。と。恥。て。遠。く。身。装。を。程。も。われ。一。個。の。奴。隸。を。走。り。來。て。奴。客。人。の。伴。當。上。稻。城。の。母。女。の。向。注。所。を。退。り。村。長。共。侶。目。今。宿。所。へ。還。る。と。告。上。と。英。虞。殿。の。指。揮。あり。と。叫。ま。る。と。卒。案。内。を。快。來。喜。と。の。庶。吉。心。多。小。六。は。對。して。茶。と。告。別。の。件。の。奴。隸。を。引。て。出。る。と。某。下。某。生。更。題。木。造。内。匠。親。政。の。宿。所。を。泰。勝。が。夕。夕。と。罪。惡。脱。る。所。多。く。既。の。禁。獄。を。れ。母。親。痛。く。駭。然。と。歎。て。親。族。と。聚。合。衆。議。と。疑。い。故。會。を。思。ふ。術。計。を。所。り。折。り。良。人。へ。城。修。造。の。總。執。事。を。何。射。賀。の。在。る。馮。心。の。女。兒。の。他。の。團。司。の。側。室。を。引。板。屋。殿。と。稱。せ。る。鐘。愛。今。の。盛。衰。の。父。親。政。が。權。臣。を。做。登。り。と。女。首。の。庇。然。と。泰。勝。と。著。打。勝。む。同。胞。を。れ。甘。術。あり。と。尋。思。と。し。その。黃。昏。より。潛。り。子。を。乘。走。り。と。引。板。屋。の。局。赴。り。困。談。數。刻。及。び。と。人。大。く。の。知。ら。げ。の。慈。而。泰。勝。の。母。親。の。詰。目。未。明。還。り。と。腹。心。の。老。僕。們。の。

機密と示し、わが筋も有司の獄卒を漏さず、人情を察し、
 泰勝がうを憑き、日毎獄舎の食餌を餽して、海を回す。この情々
 地の助言をたけ、任りし程、泰勝が做す悪事、只那信夫の事、年々
 改の勢、い假りて忌憚り、或人の妻妾を誦淫し、或民間の美女を
 返せしもの、留めて妾をあるもの、今番の事、有司亦復泰勝を獄
 半く、これらの虚実を鞫問せし、泰勝即便陳言す。今此鞫の趣、
 あるの、流言の、怪の、身の非と知れ、言と飾る、信夫を故きて奪
 なる、初某媒妁と、娶らんと欲せし、那親稻城守延が飽き、罵辱
 さ怒る、堪え、正る、然とも某が、若黨、杉内と記若、の、
 さ存なる、那若黨、守延、罵られ、怨あ、殺し、後、其、
 情の、如く、然とて、證據ある、陳言す、甲斐、とて、黙止、
 再

度、の、譴責、已む、所、是、實、願、杉内、と、記、右、の、擧、
 罪、犯、と、命、と、惜、む、わ、ぬ、も、の、
 及、
 俱、
 罷、
 怨、
 杉内、
 果、
 志、
 等、
 言、

是る怨ふと遠箭を射て殺し後子泰勝を告て其身の功をせしむ。招了かなを明白る。
 然れは是泰勝が罪過聊輕に似ら勿論信夫と豪奪と別莊を隠し措けの賊罪を
 せしめしむ。信夫幸ひに犯されざる處せんとみぐるも報有司門が稟を所右の
 如し。裕と云恰との重罪の兩個の若黨泰勝の元町をともと社内と手記右處を死刑に
 せしむ。泰勝并に敵介門を杖罪に處て追放したるの美をあらぬればか。人もあげよ告る
 る。小六も听々冷笑ひて最憚りる。御説とも曾て非除泰勝が吩咐で稲城守
 延を射させとも害せしむ。折那社内門を罪せしむ。允と俱に秘した。泰勝が罪重く
 君那晋の史董狐が趙盾君を殺せりと寫せしむ。史董狐の晋の靈公不徳の君や
 其の性酷く傲りたる。又趙盾の晋の正卿の心操忠節即れども靈公を諫れども靈公听さ
 鬱鬱愠く必ひて殺さんとする。西之番ふ及びる。趙盾脱去ま欲とく。晋の境を去る時ふ
 將軍趙穿と喚做その靈公を桃園に罷不てこれを殺しけり。これよと趙盾がかり來る

位不復せし。晋の太史董狐が書と趙盾君を殺せりと掲て朝に示せし。趙盾を誣
 して殺せし。のの趙穿牙之俺罪をよとら。董狐の听さ。これよと。子ハ晋の正卿をふ。これ
 とも境を出ぎ及て國の乱を誅せし。子ハ申と誰と。のの孔子これを傳へて董狐は是古の
 良史中をありけれ。法を書くと隱を。宣子。趙盾も良大夫之法の爲に悪く受たり。惜多
 疆と出る。免念ののれとを。語の左傳及史記に見え。這故事の泰勝の罪惡と異は。色
 どもその理は一致。君の文武の名家を。はる。か。の理を。怨せ。の素より故ある。る
 法。今諫。六日の昔。蒲。その申。斐。ある。は。法。度。の。君。の。所。亦。み。破。り。あ。り。
 民。馬。を。從。ん。孟。軻。の。境。入。る。每。國。の。大。禁。を。同。ふ。の。法。律。暗。く。の。罪。を。易。し。た。り。
 身。の。暇。を。賜。り。て。允。と。告。別。と。立。ん。せ。し。満。泰。主。の。慌。く。喚。返。さ。し。て。の。趣。道。
 理。至。極。極。然。と。汗。を。ま。で。最。取。か。く。思。ふ。も。今。ゆ。せ。ん。と。ま。信。の。節。は。不
 似。て。鳥。許。る。も。泰。勝。が。祖。木。造。政。勝。の。後。村。上。天。皇。の。河。内。巡。狩。は。し。ま。せ。折。陪。臣。を。

あつとてふたこのあつたもや
あつとふたひやあつたあやを
合情引板屋請恩赦
たへぬぢりあつた切の草

あつた



お昔



小六再謁國司
水入り大をよりのもか
たし死城をよりのもか



お昔

有像第五

軍功の折先大人氣の右大臣能の感状今番の軍功拔着美後子孫罪ありとも
 七代も赦下と寫れと豫より傳はるとある不泰勝が陳き所と杜内与記右記右記後
 度の招と申と啗合まつともて後の如く計し入るのと亮查われりと故実を引き出す
 陳謝小六とも母膝と杖と御説餘義をとると然る由緒ありのも初よりと緝
 捕の沙汰御斟酌もあるは既に林獄せられ後古昔の由緒と云云と思召出されの憚り
 る前後不都合愚意よるともも晩生他御の孤客と也貴を犯し是非論と
 又稟を送りもる信せればと諫を送り識を送りれ志同とかで交るとは故心と
 行路の心をとると信れば且泰勝の罪過に左まれ右もあれ他が祖の忠義を顧み思免の
 諺を如える信夫が親守延の忠義を思召れ也守延の忠義と文武長の
 量義小國司の死改名へ京都將軍義滿公の諱の一字授られる諺及びの由緒當日
 稻城守延の管の非を陳し面を犯し諫稟せし外にも故を送り他御とすとは

二君仕志猶當國の逸民多と非命の身故りと以復まさめの由の妻子の不幸也且
 その女見の二親を孝のの守延の忠義夫の孝の後々美談あんと憐みの
 正まく何ぞと民の父母とも願ひ稻城の後々忠と賞せれ信夫が孝の國表
 まで善と勸めの徴を奉と悪徒走り亂賊子怕臭古の有道者の人贈る小言
 のと晩生弱冠鄙陋も身の分限をとて博士態を備へると越前求るあはれ惶も
 先に世の同朝歷仕の舊縁を人のの所を奉て忠告せまく欲をの罪の言一最
 冥り不敬と允めぬと肝胆を吐き明辨理論の英貞將曹の它の近習も醉る如
 く醒る如く且感一且沾と背汗を流ける中の滿泰主の心竊に怒るといふも素
 より長者のの氣色も顯ると所果てり趣亦是理の信夫が孝の由緒縁
 とも然るのも賞ます但守延忠臣の信と南朝北朝のとも中直
 らせぬひはれ足利氏を今も不思嫌とるも義滿懇意の旨を表し諱の一字故

授けられし是當家の面目多し守延獨れを否と衆議不愜罪はるると諭さ小六をば
 のを否愚意の御説と異へ鹿苑院殿議當將軍機信裏く表裏其のを推言約
 背くことあ次の御位小倉宮の即れぬ君が御改名の甲斐あん足利氏備約
 背はる宮を退けしむとの折國司の必怒りと那宮の死與斬主と深く一思高く甲兵
 三萬足利氏と戦ひぬともあまそ折死名の満の字と何処も措かんと返さんとてはる
 志を尽名告るも快くも後悔其首立すみ其の胡慮もあん然是も亦知るか
 守延の死もあまそと面と犯と諫めけんその忠をの義我知るは最も愼らむ後
 醍醐天皇新田楠軍功の大く劣り高氏王御諱の一字と賜り高の字を尊の
 更で尊氏成され那人も若く叛らるる終南朝臣たるは折の各の尊の字を
 會復しぬ方及せぬれば後々まの御失策のと朽をなると國司の心はぬを前
 車後轍相續て反覆の悔敬言かたり信と悟りあはるるはつれて滿泰忙然と初て醉の

醒るが如く羞る貌と更めて高き才子の妙論人の視聽と極し後学ふるを言かり那稻
 城守延の後を立るはかまのあねと男兒を争何せん和殿今より敵藩と封助て長
 留りぬ俸禄の請依るべ然るるは俺媒姉と信夫を和殿の妻せん則是守延の忠を
 賞まる與されと生諭して合はれぬ老波女親切貞身と小六は堪え艱然とてそ
 何の言申せん信夫の晩生が妹入寔は姉母の子と云ふもいふと取女は御親切有か
 りま慚愧いふも父母の送體と禽獸無比と云ふことと願ふ國司の晩生が稻城母と
 憐て那泰勝と憎と信夫の情ある故と云ふもいふもあはるる千尋の海と測るとも
 人の心の量るべからずかき物体と云ふもあはるる御免と被る且晩生の統袴の為か管中の
 鳥と云ふこと願ふは國內を武者修行と云ふ筋骨と銚んと欲き外は御高預り
 せられたる木夾を返進と云ふ辞別の思ひも入りしは快舟の暇と云ふと強面く推辞と懐
 より那木夾を會わたり恭しく扇を載て近習と遍与さんとてけと國司の意を推察めて

是れ且その俵措れよか。當地の在留願一から今ゆふ力及の然る俺足利家へ和殿の
 心もつえあがて。舊旗の獨子なれ俺弟も昔の武者修行の與廻國する馬
 旅亭の障りも。下知せんと請人因てその木夾の和殿の懐かして異日の證據せ
 られよか。皇義の南北兩朝御合體まき折鹿死院の沙汰とて北畠の名家へ何まれ彼
 まれ願れと二條の允志と。町寧まのれ六第一の小倉宮の次の御位即ち
 第二の當家子々孫々伊勢の團司たるん。まふふと第三の天正所望の報せられ侍れ今
 番和殿のうを兼引れんと疑ひる。あを舊縁と忠告の實義も答ふ志ある推辞のひそ
 と懇切の説示と又路費の資ふと金二百兩二包と目録添て牽れられ小六と推辞と
 ぶ欵の演別を告て又將曹ふ引れ。退れ去んとし。亦別席史徳食応あけり。登時小
 六とお曹ふ就て所望の一美あ。その何事と尋ふ。又去の次の巻首解分はを聴ねか

開卷驚奇俠客傳第二集卷之四終

